

張寅性

『現代日本の保守主義——批判的保守主義の心理と論理』

장인성 『현대일본의 보수주의——비판적 보수주의의 심리와 논리』

文 京洙



연암서가 (ヨナムソガ), 2021

ここ数年、日韓の文化や生活様式の相互浸透が劇的に進みつつあるなかで、逆に近代をめぐる日韓の歴史意識、もしくは歴史感覚の乖離がかつてなく目立っている。こうした振れ現象は、「村山談話」や「日韓パートナーシップ宣言」など、植民地支配の道義的な責任が確認された一九九〇年代の達成を思うと隔世の感を否めない。

この間、日本では、植民地支配の法的な責任どころか道義的な責任すら認めない歴史修正主義の主流化が明らかになる一方、韓国では植民地支配の法的責任を問う、二〇一八年韓国大法院の徴用工判決が国民的な支持を得た。日韓の歴史問題をめぐる危うい均衡がくずれて、日韓関係は明らかに新しい局面を迎えたかにみえる。韓国の近代史研究でも、植民地支配の過酷な実態を問い、

これに対する民族的抵抗の軌跡を論じてやまない多数派と、歴史修正主義に迎合する少数派の植民地近代化論の対立があらためて浮き彫りになっている。

だが、そういうなかで、こうした二項対立を超えて、日本の近代の歩みを、その時代を生きた人々の思惟や論理に着目して、いざよより「内在的」な視角から論じようとする研究者も着実にその地歩を固めつつある。本書の著者は、まさに、そういう韓国での日本研究を代表する研究者であるといえる。

著者の張寅性は、東京大学で朝鮮開港期の日朝の国際政治思想に関する比較研究で学位を得て、二〇〇〇年代以降は、『近代韓国の国際観念に現れた道徳と権力』（二〇〇六年）、『明治維新』（二〇〇七年）、『東アジア国際社会と東アジア想像』（二〇一七年）

など幅広い分野で業績をあげ、日韓の知的交流の第一線での役割が注目される存在である。

*

*

本書は、著者が「批判的保守主義者」と呼ぶ福田恆存、江藤淳、西部邁（以下、三者）の批評テキストの分析を通じて、戦後日本の保守主義の心理と論理を解明しようとする試みである。韓国で日本の保守といえ、保守右翼や排他的な国家主義が想定されるものが少なくない。だが、著者によれば「批判的保守主義者」は、進歩主義の理念に対峙するとともに、「保守右翼」の国家主義的な理念にも批判的なりアリストである。著者は、本書を通して、そういう三者に通底する「保守的リアリズム」(p. 2)を浮き彫りにすることで、戦後日本の各時代の問題状況に対応する保守的思想の内容と特徴をとらえようとする。

本書は、本文のみでも五百ページを超える浩瀚の書であり、短い紙幅で著者の意図や論理を正確に反映させることは簡単ではない。以下は、あくまでも評者が読み取った範囲での本書の概要である。

「第一章 現代日本の思想空間と保守主義」では、上述したような本書の意図があらためて詳しく述べられるとともに、近代日本の保守主義を、英国の憲政秩序の維持を主眼とするエドモン

ド・パークの保守思想の受容と個別化（脱パーク化によるプロイセン憲法の皇統と継承の原理の受容）という観点から説かれる。さらに本章では、三者の「批評のコンテキスト」が戦後日本の各時代を特徴づける形で示される。戦中世代の福田は、敗戦と民主化から安保闘争に至る時期（安保空間）の思想課題に向き合い、「新世代」の江藤は、主に「一九六〇年代〜八〇年代」の経済成長時代のコンテキストに対応する。戦後世代の西部は、脱冷戦時代の争点や思想課題に対応するものとされ、三者の批評意識が根差す時代のコンテキストが〈民主Ⅱ安保空間〉〈経済Ⅱ成長空間〉〈脱冷戦Ⅱ歴史空間〉として設定される。

「第二章 「平和」と「民主」——民主Ⅱ安保空間の日本と福田恆存の保守主義」では、この時代の言説世界を主導した進歩主義の虚構を、孤立をもともせず攻撃する福田の批評が論じられる。福田の拠り所は生身の生活者の感覚やリアリズムであり、「人間悪——エゴイズム、生存欲、人間の欲望、醜悪な人間性——を肯定することを要求し」(p. 130)、進歩主義のヒューマニズムを批判した。さらに進歩主義の「二項的価値を特定の理念と目的論的志向を動員して一気に乗れ越えようとする一元的志向を拒否した」(p. 234)。福田は、この「二項対立」を解消する術を、理念ではなく、「平衡感覚」や、日常生活で共有される共通感覚としての「常識」に求めた。

だが、この福田も一九六〇年代後半には現実の「二項対立」を超える「絶対者」としての「天」を想定し、「相対主義がニヒリズムに陥るのを抑止しようとした」(p. 239)。時代が「消費と廃棄の時代」の(経済Ⅱ成長空間)ともなると、「歴史と伝統」に根差す「文化共同体としての国家」が強調されるようになる。とはいえ、福田にとって「国家」の存在はあくまでも相対的なものに過ぎず、「善良な人間」は良心にかけて「善良な国民」に対立する自由がある」(p. 235)とされる。

「第三章 「成長」と「喪失」——経済Ⅱ成長空間の日本と江藤淳の保守主義」では(経済Ⅱ成長空間)での江藤淳が論じられる。「民主Ⅱ安保空間」の終わりに評論活動を始めた江藤は、「アメリカニズムを土台に構築された進歩的概念世界を解剖することで現実世界との乖離をなくそうとした」(p. 274)とされる。福田に似て、進歩的な概念や理念の虚構性を追求する根拠は生活者の「体験」と「常識」だった。若い江藤は個々人の具体的な体験や「一人の市民の素朴な常識」に拘りながら、国家に対する個人の自立的性を説いた。

よく知られているように、江藤は六〇年安保やその後のアメリカ滞在中、明治国家を理想形とする国家主義者に変貌する。この頃に江藤が取り組んだのは、米国の押し付け憲法と検閲が生んだ戦後日本の「閉ざされた言語空間」を解体することだった。

著者は、江藤がそうした「言語空間を解体すればするほど、自身の言語空間に自閉する」ようになったのではないか(p. 277)、と推論する。この「自閉」の過程で第二次大戦の三百万人の死者が召喚されて死者と生者が往来する日本の伝統Ⅱ皇統を体现する国体ⅡConstructionが目指すべき価値として説かれる。政治家の靖国神社参拝もこの文脈で正当化される。

著者はこうした江藤の変貌がリアリズムの形骸化をもたらし、「江藤の批判的保守主義は、脱冷戦Ⅱ歴史空間でもはや有効ではなくなった」と言い切る。

「第四章 「脱戦後」と「反近代」」では、脱冷戦状況で「進歩が没落し」、戦後体制の虚構が露わとなるなかで「攻勢的保守」として登場した西部邁が論じられる。西部は、進歩主義への批判を超えて、近代への「懐疑」、「産業主義と民主主義の過剰をもたらしした高度大衆社会に対する懐疑を主張」(p. 280)した。さらにこれを克服するために共同体的な価値を重視する伝統に対する信仰を求めて「保守の幻想」「保守のユートピア」を夢見た。

西部は、国家や天皇制を絶対的な価値とはみなさなかったが、個人が歴史的に形成された共同体や秩序のなかで生きることに関心があった。こうした「共同体志向の保守主義」(p. 209)を福田や江藤の「批判的保守主義」の系譜として論じることが果して適切なものか、といった疑問も生じる。

「第五章 批判的保守主義と保守的主体化——批判的保守主義の心理と論理」は本書の纏めにあたる章であり、「懐疑する保守」「名分と実際の間」「浪漫とリアリティの間」、そして「自閉する保守」の四つの論点に即して三者が比較検証される。

「懐疑する保守」では、「保守的批判精神の核心は懐疑主義もしくは懐疑精神 (scepticism) である」(p. 520) という見地から、信仰やドクトリンとしての保守主義を嫌い、気質や態度として保守的であること (to be conservative) を擁護したオークショット (Michael Oakeshot) の議論が紹介される。そのうえで本書に登場する保守主義者たちは、オークショットが嫌う信仰や理念へと向かう「熱狂」から自由ではなかった」(p. 525) とされる。

「名分と実際の間」では、相対主義や二元論のディレンマを宿す「戦後体制の宿命」からの脱却への模索が論じられる。三者は各時代の思想空間でこの「宿命」を乗り越えようとした。とくに〈脱冷戦Ⅱ歴史空間〉の保守主義者 (江藤と西部) は西欧的な近代を否定しつつ日本の歴史と伝統、共同体/国家へ回帰し、「耐え忍ぶ主体から闘争する主体へと変貌した」(p. 533) とされる。「浪漫とリアリティの間」では現代日本の批判的保守主義者は、「近代」に発するエゴイズム (福田)、喪失感 (江藤)、そしてニヒリズム (西部) を克服するための術を伝統に求めたことがあらためて論じられる。だが、日本の伝統の核心的価値としての「天

皇」については、福田・西部が天皇を絶対化しなかったのに対して、江藤の天皇への「尊崇の信条」は「昭和の終焉」によってさらに深まった。江藤が「若き日にみせた鋭利な批評感覚は鈍」り、「死者」を記憶する空間としての靖国神社を積極的に擁護したのもこれに照応する」(p. 542) とされる。

「自閉する保守」では、脱冷戦期となつて保守主義が浪漫や伝統に自閉してリアリズムが形骸化していく状況が論じられる。保守の倫理観念や文芸的教養が衰えて「文化的保守主義の凋落」(p. 547) が明らかとなる。そういうなかであらためて福田が「日本の保守主義の原点として吟味する価値がある」(p. 549) とされる。保守主義をめぐる著者の思いを確かめるかのように、「保守派は見とほしをもつてはならない」に始まる「私の保守主義観」(『福田恆存全集五巻』) からの長文が引用される。

*

*

本書で著者は、あくまでも三者の遺したテキストに即した論述に徹し、著者自身の歴史問題にまつわる立ち位置や主張はほとんど語っていない。それでも著者がパークやオークショットを援用しつつ「批判的保守主義」の意義を語り、これにいたく共鳴していることを本書からうかがうことは難しくない。本書のそうした論調は、日本の進歩や革新の潮流がそうであつたように、韓国で

もいわゆる「運動圏」を中心とした進歩派の「巨大談論（大きな物語）」が色あせて力を失いつつあるなかで、従来の反共保守とは区別される「合理的保守」の潮流が政治や言説の世界で台頭しつつある状況にも符合している。

だが、いうまでもなく個への拘りやリアリズムは進歩主義や右派の国家主義への批判には有効であつても、それ自身が「主義」としての体をなしうるわけではない。敗戦後の丸山真男が「国民主義」に基づく「近代的国民国家形成」を主張したように、個人と公を結ぶ回路が何らかの形で設定されなければならない。本書でも紹介されているように、「私の保守主義感」（一九六〇年）の頃の福田は、「保守主義」は見通しや大義名分をもつてはならない、とある種の居直りともとれる言い方をしていった。だが、この福田も結局、伝統に回帰し「文化共同体としての国家」を構想するに至った。

三者が公への回路を模索する過程で行き着いたのは「明治」という時代だった。この三者に限らず、丸山真男などのリベラル派も含めて、戦後日本の言説の世界で明治人の發揮したリアリズムや倫理観にこの上ない共感や日本人として矜持を見出すものが少なくない。だが、いうまでもなく、「明治」とは、朝鮮やアジアの視点からすれば「征韓」や「脱亜」といった侵略的なアジア・朝鮮観によつて特徴づけられる時代でもある。その意味では本書

でその違いが強調される「批判的保守主義」と排外的な国家主義の関係はいわば「紙一重」、もしくは「地続き」の関係にあるといつてよい。本書はそういう危うさを踏まえて「批判的保守主義」の意義や可能性をぎりぎりまで追求した稀有の業績であるといえる。